

ユニバーサルデザインの街の実現を夢見て

相模原市車いす友の会 会長代理 町田絢一

相模原市車いす友の会は相模原身体障害者連合会（相身連）に昭和48年に入会、昭和54年4月に独立し発足。リフト付き送迎車（あじさい号）も車いす友の会からの要望で同月に発足。ドアツードアで行動が出来るようになり、公園散策、買い物、バーベキューなど外出の楽しみが味わえるようになった。

老人を含め、車いす使用者でも体の調子急変の心配やトイレの場所が判らない為、外出を控え、薬や、病院の世話になる人が多く目立つ。「みんなのトイレ」が一時話題になり、街にも設置され目に着くようになったが、障がい者や足腰の不自由な老人には入りにくく、使いづらい。

相模原市の災害用備蓄倉庫に障がい者用トイレを置くとの事で2011年に車いす友の会がお願いし「札幌式トイレ」の改造版で、おむつの交換や、トイレの最中に具合が悪くなった時、横になれるような板敷便座で使いやすい物を作ってもらった。このトイレを主要なコンビニの入りやすい位置に設置して頂くと、安心して外出が出来るようになると思う。主要なコンビニに限定したのは、掃除メンテ（防犯を含め）もお願いしやすく、必要品や買い物も手軽にでき、健常者との交流もし易いとの考えで提案している。



障がい者、老人などが、外出しやすい街になれば、家に閉じこもり、病院や、薬漬けにならず、健常者との会話もでき、“障がい者を理解して”と、わざわざ言う必要もなくなり、ユニバーサルデザインの暮らしやすい街に一步近づくのではないだろうか。

障がい者の団体行動は市の福祉バスが無くなると難しくなるが、個人の移動は、公共交通機関も協力してもらえるので遠く迄出かけられるようになり、有難く思っている。街中の移動は道路と歩道の段差や、歩道のないところ、傷みが激しいところが多く公園巡りや自由な散策も難しい。ラウンジ的街で気軽に外出できる事が車いす友の会の夢である。

